

保育園実習における看護学生の体験と学び

Report of an experience and the learning of the nursing student in the nursery school training

清沢 京子 原 理沙 増沢 景子
Kyoko KIYOSAWA Risa HARA Keiko MASUZAWA

要旨

本研究は、保育園実習における看護学科の学生の学びと経験について明らかにすることを目的とした。対象はA短期大学看護学科2年生59名。実習後のレポートの分析から、保育園実習で何を学んだか、そしてどのような体験をしたのかが明らかになった。学生は、子どもたちのコミュニケーション力に助けられて子どもと遊び、子どもとのコミュニケーションを通して個別の成長発達の違いに気づいた。また保育士の〈子どもの力を引き出す保育スキル〉から子どもの成長を促す援助を学んでいた。2日間の保育園実習により学生には〈子どもに対する好意的な感情〉が生まれ、保育士の〈子どもの力を引き出す保育スキル〉を病院実習へ活かしたいという学習意欲に繋がっていた。

【キーワード】 看護学生 保育園実習 学び

I. はじめに

少子高齢化や核家族化により、大学生が小児と関わる機会が少なくなった。総合病院における単科の小児科は減少し¹⁾、看護学生が病院実習で病児を受け持つことができないケースもある。しかし小児看護分野では小児専門病院などで医療の高度化が進んでいることから、小児看護のニーズが減少しているわけではない²⁾。A短期大学看護学科(以下A校)では、小児看護学実習Iとして1日の小児専門病院の見学と2日間の保育園実習を取り入れてきた。保育園実習は健康な乳幼児の成長発達や日常生活行動の特徴を理解し、適切な発達への援助と保育技術について学ぶことを目的としている。保育園実習を病院実習の前に行うことにより、成長発達の著しい乳幼児期の子どもの理解を深めることができると考え、実習は2年生の夏に2日間行われる。保育園実習は約60名の学生が2～4名ずつ配置されてM市内20以上の園で実習となるため、教員の巡回だけでは実習の全容が把握しきれない現状がある。そのため、本研究により実習記録やまとめの会での記録をもとに、保育園実習で学生がどのような体験から学びを得られたのか、また看護学実習としての目標は達成できたのかを検証し今後の実習に活かしたい。

II. 研究目的

- ① 保育園における看護学生の実習体験の現状
- ② 保育園の学びは、看護学実習Iの実習目標を達成できていたか

- ③ 保育園実習を今後の病院実習にどう活かそうとしているか
について明らかにすることである。

III. 対象と方法

1. 対象者

保育園実習に参加したA短期大学看護学科2年生61名のうち、説明を受け研究に同意した学生59名(男子10名 女子49名)

2. 研究期間 2019年9月1日～12月31日

3. 研究方法

質的データを用いた帰納的研究。データは本研究に同意を得られた学生の実習後レポートを使用した。実習後レポートは、保育園実習で学んだことと小児看護への応用について、自身の具体的な実習体験をもとにA4用紙2枚程度に記述するよう指示をした。分析にあたり実習レポートにはID番号を付与し匿名化を図った。学生が子どもにどのように関わり何を学んだかについて記述されている部分に注目し、要約しラベルに転記した。意味内容の類似したラベルを集めてカテゴリー化し分類した。学生の5つの実習目標 ①子どもと親しみをもって関わる事ができる②保育参加により健康な乳幼児の日常生活行動を理解できる③保育士の援助から学ぶ事ができる④保育における遊びの意義や望ましい生活環境を理解できる⑤自己の子ども観を明確にする、と照らし合わせ、学生がどのような場面で目標を修得できたを具体的な記述やまとめの会での記録をもとに裏付けをとりながら分析した。研究者はカテゴ

リーが具体例の本質を表しているかを、学生の視点に立ち何回も読み直し、検討を重ねることで研究対象となっている現象を記述する最もふさわしい言葉となるよう努めた。最終的にカテゴリーとカテゴリーの関係から実習の全体像を把握した。

IV. 倫理的配慮

実習評価終了後、対象者には研究者が直接文書と口頭にて、研究目的、研究方法について説明した。研究参加は自由意思が尊重され、参加を拒否することによる教育上の不利益は生じないこと、同意後も取り消しが可能であることを説明した。データは個人が特定されないよう匿名化し、研究目的以外では使用しないことを説明した。また研究結果は学会等で発表する可能性があることを説明し同意書を取り交わした。本研究は、令和元年A短期大学倫理委員

会の承認を得て行った。(承認番号 201902)

V. 実施と結果・考察

1. 保育園実習の実際

A校61名の看護学科2年生が、M市内22の保育園に依頼し、2～4名グループで2日間保育園実習を行った。2年生で最初の実習であり、22園一斉に行われるため教員は不在で巡回のみとなる。実習は2日間連続で行われるが、21園で1日目と2日目では学生が違う年齢のクラスを経験できるように配置されていた。学生の経験したクラスの配置は2日間で0～1歳児 22名、2歳児 28名、3歳児 20名、4歳児 21名、5歳児 27名であった。

保育園実習の実習目標、実習スケジュール、保育園での日課は、表1、表2、表3の通りである。

表1 実習目的と目標

目的	健康な乳幼児の成長発達や日常生活の特徴を理解し、適切な発達への援助と保育技術について学ぶ
目標	①子どもと親しみを持って関わり、関係を作ることができる ②保育に参加することにより、健康な乳幼児の発達段階に沿った日常生活行動や、園での1日の生活を理解することができる ③保育士の乳幼児への接し方から、発達段階に応じた日常生活行動や遊びの援助について考えて実践することができる ④保育における遊びの意義、望ましい生活環境について考えることができる ⑤実習を通して自己の子ども観を明確にする

表2. 実習スケジュール

曜日	学習内容
月	A M学内オリエンテーション
	P M 各保育園オリエンテーション
火	小児専門病院見学実習
水	保育園実習
木	保育園実習
金	学内 まとめの会 記録提出

表3. 園での子どもと学生の日課

時間	子どもの日課	学生の日課
8:30	健康観察 遊び 体操	職員の朝礼に参加 健康観察
9:30	おやつ (未満児) 外遊び 散歩	遊びや日課に参加 体操、お絵かき、園庭での遊び、 本読み、運動会の練習、散歩
11:00	片付け 給食準備 給食 歯磨き	担当クラスで昼食 配膳、下膳
12:30	昼寝 (年齢により 時間は異なる)	記録の整理 保育士との話し合い
14:30	目覚め 着替え	遊びや日課に参加 着替え、歯磨き 外遊び、歌の会 帰りの会など
15:00	おやつ	
16:00	順次降園	
16:30	延長保育	終了

表4. 実習での学びに関する記述のまとめ

記述の 場面	学生に共通する学び・感じたことの具体例	体験と学びの要約〈カテゴリー〉
園児との 遊び (147)	1歳児は友人に関心がなく、2歳児は平行遊び 5歳児はルールを共有して遊ぶことができる 男の子は遊びが激しい アンパンマン、積み木、絵本が好き 子どもからコミュニケーションをとってくれる 子どもとどう接していいかわからない	<発達段階や性による成長の差> <子どもの成長にあった遊び> <無邪気な子どもの コミュニケーション力>
保育園で の日課 (125)	5歳児は日課を理解して自分から行動できる 手づかみ、スプーン、箸など年齢により違う 同じクラス(年齢)でもできる子とできない子がいる テキストより発達が早い 言葉はしゃべれなくても理解はしている	<年齢、生まれ月、個人による成長の差> <幼児は思っている以上に理解している>
保育士と の関わり (112)	「どんな気持ちかな?」「じゃんけんして」など子どもに考 えさせる 「できるよ」褒める、ハイタッチなど子どもの意欲を促す 見守り手を貸さず、待つ 赤ちゃん言葉は使わない 同年齢でも子どもによって話し方を変える 具体的なことばで伝える 保育士は笑顔で関わっている 昼寝、本読みなどのテクニックに感心した	<子ども同士でいさかいを解決させる> <発達段階や個別に合わせた言葉選び> <褒める 待つ 考えさせる> <子どもの力を引き出す保育>
保育園の 環境、安 全(32)	朝礼での欠席者、アレルギー児の報告と対応の確認 食物アレルギー児は昼食時に離れた席で食べ、食後掃除をし っかり行う 玄関を施錠し、不審者対策をする(2名) 医療・看護の必要な子どもが通園している(2名)	<入念な食物アレルギー予防策>
病棟実習 への応用 について (49)	子どもたちは大人が考えている以上のことをわかっているこ とを理解して実習する 発達段階を意識して援助したい 保育園で学んだ子どもの好きな遊びを、プレパレーションに 活かす 見守りややり遂げられるようにサポートする	<子どもの理解を得られる発達段階に 応じた援助>
その他 (42)	保育士の仕事の責任の重さと観察や話し方などスキルの高さ 子どもたちとの関わりで自分が元気になれた、楽しかった	<保育士の仕事の責任と専門性> <子どもに対する好意的感情>

2. 結果と考察

実習後レポートに記述されている具体例を実習目標に照らし合わせて分類を行ったところ、園児とのコミュニケーションについての記述が147、食事や排泄に関する保育場面については125、保育士との関わりについては112、保育園の環境、安全については32、病院実習への応用については49、その他42の具体例が抽出された。それらの具体例を意味内容により統合し、最終的に13の学びと体験のカテゴリーに統合された。(表4)それぞれのカテゴリーの説明とカテゴリーの関係を実習目標に沿って以下に説明し、実習の全体像を明らかにする。

1) 園児との遊びを通しての学び

子どもとどう接していいかわからない、という学生の記述から、子どもとのコミュニケーションに不安を抱えて実習に臨んでいる事がわかる。近年の少子化、核家族化と子どもが外遊びをしなくなったことなどから、学生と子どもの接点は少なく子どもをイメージしにくい状況にある³⁾。また、近年は人とのコミュニケーションに不安を抱える学生も多い⁴⁾。加えて今回の保育園実習は2年生の初めての实習でもあるため、学生たちは非常に高い緊張感を抱えて実習の初日を迎えていたと思われる。しかし、学生は年長児のクラスを担当すると、子どもたちの方から声をかけられ遊びの輪の中に入ることができた。これをく無邪気な子どものコミュニケーション力>とした。学生が苦手と感じていた幼児とのコミュニケーションも、く無邪気な子どもたちのコミュニケーション力>により実習の緊張感が和らいでいった。子どもとの園庭での鬼ごっこや砂遊びを通して、く発達段階や性の違いによる成長の差>やく子どもの成長にあった遊び>を知ることができた。園児とのコミュニケーションについて記述された具体例は147と多く、保育園実習において子どもたちとの遊んだ経験は、学生にとって深く心に残る経験であったことが現れていた。

2) 保育園での日課を通して学び

保育園での食事や更衣、排泄、昼寝などの日課の場面では、学生は子どものく年齢、生まれ月、個人による成長の差>を実感する。0～1歳児はおなじクラスでも手掴みで食事をする子、スプーンを持てる子などく年齢、生まれ月、個人による成長の差>の大きいことを知る。また関わることで会話はできない1歳の幼児であっても非言語的なジェスチャーなどを交えて表現し指示をしたところ伝わることがわかった。学生は、子どもが言語的なコミュニケーション能力が身につけていなくても、理解できないのではなくく幼児は思っている以上に理解している>ことに気づき、テキストに書かれていた以

上に実際の子どもたちは成長が早いことを実感していた。

3) 保育士との関わりを通しての学び

子どもとの遊びや運動会の練習などの場面で学生は、子ども同士のいさかいに困惑する。保育士の「じゃんけんして」「どんな気持ちかな?」という言葉から、く子ども同士でいさかいを解決させる>援助が子どもを成長させていることを学ぶ。また、子どもが不可能なことに挑戦する場面では、手を貸さず見守ったり、「できるよ!」と励まし、出来たときはハイタッチをして一緒に喜んだり、保育士はく発達段階や個別に合わせた言葉選び>によりく褒める 待つ 考えさせる>保育を実践している事を知る。

保育の場面でも学生は、保育士の子どもへの関わりから学んでいた。食べられたら褒める、食べられるまで待つ、着替えも自分でできるまで待つ、できたら褒める、とく褒める 待つ 考えさせる>保育が実践されていた。遊びや行事の練習など日課を通して保育士は、く子どもの力を引き出す保育>をしていることを学んだ。

4) 保育園の環境、安全についての学び

総務省の資料⁵⁾によると、調査した保育所の9割に食物アレルギー児が在籍し、5割の保育所で配膳ミスなどの事故が発生している。2割の施設でエビパンの処方児が在籍しており、給食時に食物アレルギーで救急搬送される事故も発生している。誤食を回避する対応の難しさから食物アレルギー対応の全員給食はまだ十分には全国に広まっていない⁶⁾と言われる中、M市立保育園では食物アレルギーへの対応が実践されていた。幼児はまだ理解力が十分でなく自己防衛できる力はないことから想像しないことも起きる。隣の子どもが落としたりものを食べてしまうおそれや、口に入らなくても触っただけで症状が出る子どももいるため、こぼしたものが触れないようにすぐに掃除をする必要がある。保育園実習で学生は、毎朝の朝礼で食物アレルギーの子どもとアレルギー食材の確認を共有している場面を見学し、給食の配膳時のチェック、食事時の観察、食後の片付けや掃除などを通して食物アレルギーの事故防止対策の実際について学ぶことができた述べている。安全や事故防止に関する記述はほとんどが食物アレルギーに関する記述であり、学生は給食時の様子からく入念な食物アレルギー予防策>を学ぶことができた。不審者対策や玄関の施錠、医療的ケアの必要児についての記述は数名に留まったため、学生の学びとしてのカテゴリー化はしなかった。また、半数近くの学生のレポートに、環境や安全についての記述がなかった。

5) 病棟実習への応用について

2日間の子どものコミュニケーションや保育園での日課を通して学生は、<子どもの理解を得られる発達段階に応じた援助>の重要性を感じていた。様々な発達段階の子どもと関わる中で、<発達段階や性による成長の差>や<年齢、生まれ月、個人による成長の差>を実感していたことや、保育士の<発達段階や個別に合わせた言葉選び>から、小児看護学実習でも応用したいと考えていたことがわかる。学生の記述では、プレパレーションに関する記述が多く見られた。プレパレーションは入院中生活や治療・処置などによる子どもの不安や恐怖を最小限にし、心の準備を整え子どもの主体性を支える援助である⁷⁾。子どもと看護師のコミュニケーションを基盤にしながら、発達段階や個別性によって、絵本や遊びを活用して行われる。保育士の声掛け、保育のスキルの実際を学べたことや、3歳未満はアンパンマンが好き、男の子は乗物に興味がある、泣いていても興味のある絵本を差し出すと泣き止んだ、など保育園で実際にその場面を経験できたことでその理解を深めることができたと思われる。知識だけでなく保育園実習により<子どもに対する好意的感情>が生じたことは、小児病棟実習の緊張を和らげる効果もあるのではないかと考える。

VI. 結論

1) 保育園における学生の実習体験のプロセス

学生は子供とのコミュニケーションに不安を抱えて実習に臨むが、<無邪気な子どものコミュニケーション力>により子どもたちとの関係を築くことができる。子どもとの遊びの経験を通して学生は、身体機能、言語やルールを理解、活動量などの<発達段階や性による成長の差>を実感し、<子どもの成長に合った遊び>を知ることになる。また食事、衣類の着脱、昼寝などの保育活動を通して学生は、<幼児は思っている以上に理解している>ことや<年齢、生まれ月、個人による成長の差>にも気づくようになる。しばしば起こる子ども同士のいさかいに戸惑うが、保育士の<発達段階や個別に合わせた言葉選び>で<子ども同士でいさかいを解決させる>関わりにより子どもが自分で解決していく様子を観察する。給食時に学生は園での<入念な食物アレルギー予防策>を学び、<保育士の仕事の責任と専門性>を実感することになる。保育士の<褒める待つ 考えさせる>関わりは、<子どもの力を引き出す保育>であった。保育園実習により学生は、小児病棟実習への意欲を持つことができ、保育士の<子どもの力を引き出す保育>は<子どもの理解を得られる発達段階に応じた援助>をしたいという抱

負に繋がり、実習終了時には<子どもに対する好意的感情>を持つことができた。

2) 保育園実習の目標は達成できていたか

研究結果より、①学生が子どもと良い関係を作り、②発達段階に応じた保育園での子どもの生活を理解し、③保育士から発達段階に応じた援助を学ぶという目標は達成できたことが示された。④保育園での生活環境や安全面に関する記述ではアレルギー事故防止策の記述に偏りがみられ、半数近くの学生に記述されなかった。アレルギーを持つ子どもが担当クラスに存在しなかったことも考えられるが、幼児期は危険を回避するための運動能力や認知機能が未熟であり⁷⁾、事故を起こしやすい。子どもの注意不足や衝動的な行動で、病棟実習においても常にベッドからの転落などの危険が伴い⁸⁾ 小児科の看護師にとって子どもの事故防止策は重要な援助のひとつとなっている。そのため、安全面についてはオリエンテーションや終了後のまとめの会などで、認識を促すような指導が必要であることがわかった。

3) 保育園実習の病院実習への応用

学生は病院実習への応用として、発達段階に応じた援助と遊びをプレパレーションに活かすことを挙げている。また、それと共に楽しい実習であったことや保育士や子どもたちへの感謝の言葉も述べられていた。

保育園実習で学生は、多くの乳幼児と接触する機会を持つことができた。幼い子どもとの接触体験は乳幼児好意感情に大きく関連し、乳幼児に関する知識より乳幼児と関わる機会の方が好意感情を高められることが報告されている⁹⁾。さらに重要なのは、その体験の『数』だけでなく体験の『質』を問わなければならない¹⁰⁾。今回の実習で学生たちは、保育士や子どもたちに助けてもらいながら楽しい経験ができたと感じていた。学生は保育士から質の高い保育のスキルを学び、子どもたちとの良い関係を築くことができたという『質の良い接触体験』により、子どもに対する好意的な感情が生じたといえよう。そしてそれを看護に活かしたいという思いが、小児科での病院実習を前向きにとらえることに繋がったと考える。

VII. 研究の限界と展望

本研究により、保育園実習での学生の体験と学びの現状が明らかになった。具体的な事例を基にした59名の記述は学生の実習体験を生き生きと語っていたが、その一方で中には読み書きが苦手で、文章で自分の言いたいことを表現できない学生も存在する。また、インタビューのような言語的なやりとりではなく、字数制限により対象者が記述できなかった

ことも予測されることから、現象を十分に説明できていない部分もある。

そうした研究の限界はあったものの、今回の研究目的にはないが学生たちが実習を通して保育職の専門性に気づいていくプロセスも示された。2007年より医療保育専門士が日本医療保育学会の学会認定資格となり、大学小児病棟や小児総合医療施設での病棟保育士の配置率は増加し¹¹⁾、小児科病棟で保育士は重要な役割を担っている。また、現在保育所保育指針には看護師配置基準は記載されなくなった¹²⁾が、保育所における看護師配置率が向上しているという報告¹³⁾もあることから保育所では看護職の専門性も求められている。以上により保育領域と小児看護領域では、保育士と看護師の協働が重要であることがわかる。学生が実習を通して保育士の専門性と責任の重さについて認識できたことも意義深い学びであると考えられる。

12) 日本保育協会：保育所環境整備に関する調査研究報告書 保育所の人的環境としての看護師等の配置 平成21年度、2010、3

引用・参考文献

- 1) 厚生省：医療施設（静態・動態）調査・病院報告の概況
- 2) 西海真理：小児看護の専門性の今後の課題、小児保健研究 67(1)、3-9、2008
日本小児保健協会
- 3) 黒坂知子：学生の小児に対するイメージ授業前後の比較－、東京医科大学看護専門学校紀要、4(1)、P.28-34、1993
- 4) 飯塚一裕：大学生のコミュニケーション意識について－テキストマイニングによる分析－、愛知教育大学研究報告、59、P.49－53、2010
- 5) 総務省：http://www.soumu.go.jp/kanku/chubu/menu_11.html
- 6) 厚生労働省：保育所におけるアレルギー対応ガイドライン、2011
- 7) 系統看護学講座 小児看護学概論、小児臨床看護総論、医学書院、P.226、2018
- 8) 小林弘幸：小児医療訴訟の現状と対策、順天堂医学、51巻4号、P.490 - 500、2005
- 9) 安積陽子：看護系・福祉系大学生の養護性の形成に関する一考察－性別と乳幼児接触体験との関連から、甲南女子大学研究紀要 P.23 - 28、2007
- 10) 野村幸子、河上智香、長谷典子ほか：子どもとの接触体験から見た看護学生の子どもイメージ、人間と科学、県立広島大学保健福祉学部誌、7(1)、169 - 180
- 11) 鈴木裕子：病棟保育職の現状と課題、東京家政大学研究紀要 第40集、2000 P.118